

文壇資料

阿佐ヶ谷界限

村上 護

講談社

文壇資料

阿佐ヶ谷界隈

村上 護

講談社

著者略歴

昭和16年愛媛県大洲市に生まる。

愛媛大学卒。

著書に、「放浪の俳人山頭火」「私の上に降る雪は」

「ゆきてかへらぬ」「聖なる無頼—坂口安吾の生涯」

「明治俳句短冊集成」(講談社刊)がある。

現住所・東京都杉並区和泉2-16-19

文壇資料 阿佐ヶ谷界限

© 1977

MAMORU MURAKAMI

第1刷 昭和52年7月20日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は

お取替え致します

定価 1300円

著者 村上 護

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(945)1111(大代表)

郵便番号 112 振替東京 8-3930

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

0095-269359-2253(0)(セ)

はじめに

阿佐ヶ谷界限というのでは、漠然としすぎているかもしれない。新宿からだ、国電の高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪の各駅を利用できる範囲を指している。この四キロあまりの沿線を、阿佐ヶ谷界限ということにしたい。

かつてこの界限には、多くの文士が住んでいた。ここに思い出すまま書き出してみると、まず井伏鱒二、太宰治、青柳瑞穂、上林曉、田畑修一郎、外村繁、中谷孝雄、三好達治、伊藤整、小田嶽夫、古谷綱武、木山捷平らが浮かんでくる。一時は小林秀雄、横光利一、川端康成、林房雄らも住んでいた。

小林多喜二、立野信之などの左翼作家も、ほとんどこの界限を根城にしていた。これに対して久野豊彦、新居格らのモダン派も、同じあたりを徘徊していた。保田與重郎、亀井勝一郎ら日本浪漫派の文士たちも、みなこのあたりの住人であった。そして、河盛好蔵、中島健蔵、臼井吉見、中野好夫、新庄嘉章、村上菊一郎ら文学者が文壇に顔を出しはじめたが、この人たちもみな、阿佐ヶ谷界限に住んでいたのだ。

こう挙げていくとき、私たちは、すこぶる興味深い現象を発見する。それは、この界隈に住んだ文士たちが、昭和に入って、文壇のイニシアティブを常に取りつづけていることである。注目すべきであろう。

といって、阿佐ヶ谷界隈には、取りたてていう名所もない。この一帯は関東大震災以後に開発された、郊外の新興住宅地で、どこにでもある似たような眺めの街だ。

鉄道（中央線・前身は甲武鉄道）が敷設されたのは案外と早い。明治二十二年のことである。甲武鉄道は、はじめ甲州街道沿いに路線を敷く予定であったが、調布、府中などの宿場住民たちは反対した。火の粉を散らして走る汽車は、藁ぶき屋根に火災をもたらす危険があった。それに加えて、激しい震動による養蚕への被害、影響を理由として猛烈な反対運動を起こしたため、やむなく当時全くの原野であり、反対も少なかった北の台地上に、コースを変更したという。

荻窪駅の開設は、明治二十四年であった。このとき駅の近くには、稲葉屋というそば屋があった。もう一軒、酒屋ができていた。あとは一面の野っ原だったそうだ。

高円寺、阿佐ヶ谷、西荻窪に駅ができたのは、大正十一年七月。その翌年が関東大震災である。これを契機に、この武蔵野へ住民の移動がはじまり、ここら一帯はいつか郊外の住宅街を形成した。それも都心への通勤が至便のために、多くのサラリーマンが居付くようになった。

サラリーマンとは、いわば哀しい階層である。震災以後は不況つづきで、大学は出たけれど、優

雅な暮らしはおぼつかない。そんな不満をひきずって、こぞって住みはじめたのが中央沿線の街々だった。

彼らはほとんど田舎出身者である。わずかばかりの俸給では、新開地のこのあたりにしか住めなかった。それにつけても、こうなるまでには多くの犠牲が払われている。学資を払うためには、先祖伝来の田畑を売り払った家もあったろう。抵当流れになった家屋敷もあったに違いない。無理を重ねて大学は出たけれど、時代は大きく変わっていったわけだ。知識の値打ちは暴落していた。

若い文士たちが阿佐ヶ谷界限に住んだのも、事情は大体似たようなものであった。彼らも一種のあふれ者で、生活のしやすさを求め、郊外に流れたというべきだろう。といって、ここでも一所に落着く文士は少なかった。彼らは借家を転々としているから、その動態はつかみにくい。

春秋の彼岸のころは、引越しいつか武蔵野の一つの風物詩であったという。家を借りるのに、現在のような敷金礼金が必要などの、うるさい契約は一つもなかった。家主はたいい鷹揚であった。家賃をためて払えなければ、踏み倒して出るのである。それでも野ざらしの心配はなく、すぐに空家は見つかった。

これは小田嶽夫氏から聞いた話だが、氏は成宗にいた時は家賃を払わぬ方針を取っていたそう^だ。いや、金がないから払えないのである。そうなると家主の方がいやになって貸家を他の人に売り、次の家主がまた手ばなし、次々家主の方が変わっていったこともあったという。そんなわけ

で、小田氏は、成宗の家では、ついに家賃なしで住みとおしたわけである。

当時の文士は貧乏で、みな似たりよったりの生活であった。中谷孝雄氏もまた頻繁に引っ越しを繰り返した。十数回は覚えていますが、思い出せない引っ越しが、まだ何回あるとのことだ。

三好達治は滞った家賃をどうしようか思案して、ヤチン、ヤチンといってるうちに夜沈々の詩語を得た。それを題目に使って、昭和十三年に随筆集『夜沈々』という本を出している。笑い話めいているが、本当のことだ、これも中谷氏から聞いた。

引っ越し貧乏ということばがあるが、引っ越しは、ときには貧窮を救う手段ともなった。東京市が昭和七年に家屋の賃貸事情調査を行っているのを見ると、東京府下、つまり山手線外の市域の家屋総数六十一万九百六十戸、うち七十六パーセントが貸家であった。それも全部ふさがっていると、四万戸近い家が空家であった。

この数字を見ただけで、家主がいかに不利かはわかっていただけでしょう。だから家賃の滞納も、さほど厳しく取りたてられることはなかった。ことに貸家の多いのは荏原、杉並で、それだけ借家人には好都合であった。この両地区に貧乏文士が集まって行ったのは、それなりの理由があったわけだ。

ついでに引っ越しの利点を、もう一つ紹介しておこう。それはたびたび繰り返した太宰治の引っ越しである。それで彼は精神の窮地からも脱出したというのである。それを評して、かつての同人

仲間の保田與重郎は、

「今日、居所の変化とともに、その作風まで変化するような作家は稀有のことである。太宰がいかに平生、その人間生活のなかで、その限界までの純粹思考をもって生きているのかがこれである」

と書いている。

そうだ、私は文士の引越し話をしようというのではなかった。阿佐ヶ谷界限に住む文士たちの交遊を書こうとしている。だが、この交遊たるや呉越同舟で、まったく雑然紛然としたものだ、さてどうなるか。その成果はわからないが、昭和初期には、なにごとにつけ「いけるところまでいてみましょう」という言い方がはやったそうだ。私もそんな氣持で、阿佐ヶ谷界限の文士たちの交遊を見ていこうとするのである。

このたび、この著を纏めるにあたって、第一出版センターの菊地康雄編集長と担当の網野功氏から、編集者から見た文士の生活、交遊というものを、いろいろと教えてもらった。それがきっかけで、私は文壇資料の落穂ひろいを試みるのである。いささかでも読者諸賢の関心を得たならば幸いと思うものである。

昭和五十二年四月

著者

目次

はじめに 1

I 交遊点描 13

支那料理店ピノチオ 14

将棋の話 24

掘り出し 33

濁り酒 42

II 中央沿線 53

震災以後 54

呉越同舟 63

新宿・紀伊国屋 73

横丁の青春 83

Ⅲ 阿佐ヶ谷界限の文士たち 95

招かざる人 96

三三五五 106

異色の顔ぶれ 115

同人仲間 125

Ⅳ 崩壊の予兆 135

赤い風車 136

代走者の役割 147

日本浪漫派 158

素材の問題 167

V 悠々閑 179

「阿佐ヶ谷会」のこと 180

転機 189

御坂峠 199

釣りの話など 210

VI 悪時代 221

ある反逆 222

南方戦線へ 233

銃後の軽み 243

末期の眼 253

VII 戦後の変貌 265

屋台の梯子酒 266

ハモニカ横丁から 277

異端の登場 286

最後の「阿佐ヶ谷会」 298

あとがき 307

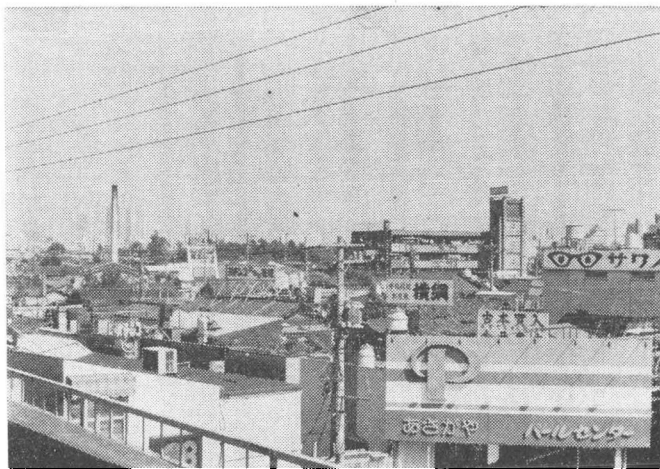
関係略年譜 310

参考文献 318

装幀・森下年昭
切り図・村上保

文壇資料

阿佐
ケ
谷界限



阿佐ヶ谷界隈の展望

I

交遊点描

支那料理店。ピノチオ

支那料理店。ピノチオは、風変わりの店であった。

ここでは店の造作をいうのではない。集まって来る客たちが、店の趣きを変えたのだろう。阿佐ヶ谷界隈に住む文士たちが溜り場^{たまりば}にしていた。

話は昭和十三年ごろのことである。そのころ、上林曉は体を悪くして酒が飲めなかった。それでも時々、家から歩いて十数分のピノチオに顔を出すのを楽しみにしていた。そんな上林のことを井伏鱒二は、人にこう語っていたという。

「上林氏は一週間に一ぺんくらい阿佐ヶ谷に出て来て省線電車を眺めたり、半年に一ぺんくらいピノチオに来て支那蕎麦を食うだけで、ひどく幸福を感じているんだ」

これは上林も認めるところ。そして彼はその頃の支那料理店。ピノチオのことを、次のように書いている。

支那料理店。ピノチオの飾り窓には、名は知らぬが、いづれ支那の海で獲れたにちがひない大魚